

2009スペシャルオリンピックス冬季世界大会の状況と 今後の国内の展望

A study for 2009 Special Olympics World Winter Games IDAHO USA
and prospects for domestic Special Olympics Movement in the future

井 上 明 浩
Akihiro Inoue

〈要旨〉

2009年第9回スペシャルオリンピックス冬季世界大会が世界95カ国から約2,000人のアスリートが参加し、盛大に開催された。大会の内容は、世界大会に相応しく華やかで、SO独特の言葉を超えた共感が漂う素晴らしい大会であった。特に目を惹いたのは、7競技中圧倒的に参加者が多いフロアーホッケーである。雪や氷のない国のアスリートでも冬季競技に参加できるように考案されたこの競技は、冬季大会唯一団体競技でもある。もう一つはユニファイドスポーツ®の浸透である。アスリートの技術や年齢がほぼ同様な健常者とペアや同じチームを作って競技を行うものである。残念ながら日本のエントリーはないが、SO活動にとって、今後これをうまく取り入れることが、次代の地域スポーツにおける中心となりうる地域総合型スポーツクラブとの接点であり、まさにそれがユニバーサルスポーツやインクルーシブスポーツとして受け入れられるきっかけとなり、そのことがSO活動の全国的な広がりにつながる大きなカギとなりうると言えるであろう。

〈キーワード〉

スペシャルオリンピックス、ユニファイドスポーツ、インクルーシブスポーツ

1. はじめに

2009年2月6日から13日の8日間、アメリカ合衆国アイダホ州ボイジーで第9回スペシャルオリンピックス冬季世界大会が開催された。今大会は、世界95カ国から約2,000人のアスリートが参加、5,000人を超すボランティアに支えられ、盛大に開催された。スペシャルオリンピックスは、今や世界175以上の国と地域が加盟し、全世界に250万人以上のアスリートとそれを支える75万人のボランティアが活動する国際的な活動である。筆者は個人的に80年代後半から約20年に亘ってボランティアコーチとしてこの活動に携わっており、この間1991年夏季世界大会（米：ミネソタ州ミネアポリス）を皮切りに、以降5回の世界大会を経験してきた。今大会も現地では、文字通りスペシャルオリンピックスの特別な言葉を超えた共感が漂い、言いようもない感動に包まれた。今大会で9回を数える冬季世界大会に、開催されたすべての7競技にフルエントリーした新制スペシャルオリンピックス日本（SON）⁽¹⁾は、男子選手40人、女子選手21人、役員男子15人、女子11人、計87人の日本選手団として臨んだ。

1962年にアメリカで始まったこの活動は、もうすぐ半世紀を迎えようとしているが、4年に一度開催される世界大会は、非常に大規模で誠に華やかな大会である。この度、スペシャルオリンピックス冬季世界大会開会式聖火点火現地視察の機会を得たので、その状況を報告したい。一方、スペシャルオリンピックスの活動は、欧州では障害者スポーツ関係者であれば、さらに米国においては一般市民の誰



スペシャルオリンピックス冬季世界大会開会式聖火点火

もが、その名を知らない者がいない程であるが、日本においては、未だその知名度は高いとは言えない。しかし近年ようやく全都道府県に地区組織あるいは設立準備委員会が設立され、国内にもその活動が広がりを見せけている。今回の世界大会参加とともに、スペシャルオリンピックスの理念・使命と、SONの基本方針を踏まえ、今後国内でその活動がどのように受け入れられ、浸透していくか、現時点で展望したい。

2. スペシャルオリンピックスの概観

2-1 国際組織とその理念

1962年故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバー夫人が、自宅の庭を開放し開いたデイ・キャンプがスペシャルオリンピックス(SO)の始まりである。彼女の姉ローズマリーは知的発達障害があった。1968年ジョセフ・P・ケネディJr財団の支援により「スペシャルオリンピックス」は組織化され、同年7月20日、最初の国際大会をアメリカ・イリノイ州シカゴで開催した。この大会にはアメリカ国内26州とカナダから1,000人以上のアスリートが参加した。その後1977年第1回冬季国際大会をアメリカ・コロラド州で開催し、500人以上のアスリートが参加した。

そして1988年国際オリンピック委員会(IOC)と「オリンピック」の名称使用や相互の活動を認め合う議定書を締結した。現在オリンピックの名称を使用できる団体は、ジュニアオリンピックとこのスペシャルオリンピックスのみである。その後、1991年第8回スペシャルオリンピックス夏季世界大会をアメリカ・ミネソタ州で開催。100カ国以上から6,000人以上のアスリートが参加したが、1991年に開催されたスポーツイベントとしては世界最大規模となった。

ここでスペシャルオリンピックスがなぜ複数形の「S」を使用している理由を説明する。この活動は、4年に一度のオリンピック形式の競技会を開催するだけでなく、知的発達障害のある人達に、日常的なスポーツトレーニングと、その成果の発表の場である競技会を、年間を通じて提供し、社会参加を応援することを大きな目的と掲げていることを意味したものであるからである。そしてその理念は、知的発達障害のある人たちの成長にスポーツが大きなプラスになると信じ、またスポーツを通じて知的発達障害のある人たちと共に活動することは地域社会にとっても大きなプラスになるとしている。さらにスペシャルオリンピックスは性別、年齢、スポーツのレベルを問わず、共に成長し、共に楽しむ、そしてその経験を分かち合うことが重要と考える。そのため競技会は、すべての参加者が決勝へ進む形式をとっている。日常のトレーニングから示された記録をも

とに、ほぼ同レベルの最大8名ないしは8チームの競技者が予選に参加し、そこで出た競技成績でまた同レベルの競技者どうして決勝ラウンドが組まれる。つまりすべての競技者が決勝に進み、8位入賞以上で表彰式に臨むという形式がとられている。

2-2 日本国内でのスペシャルオリンピックス⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾

日本スペシャルオリンピックス委員会(Japan Special Olympics Committee = JSOC)が1980年4月に発足。東京、福岡、神奈川、長崎、大分、青森、大阪、沖縄、青森、静岡、秋田と米軍基地があるところやその関連施設がある地方とその周辺の地域に広がっていった。翌1981年10月第1回日本スペシャルオリンピックス全国大会(神奈川県藤沢市体育センター)が開催された。その後82年に第2回大会を東京(東京都駒沢オリンピック公園)で、第3回を83年に大阪(大阪市長居運動公園)で、86年に第4回を東京で、87年に第5回大会を大阪で、90年に第6回大会を東京で開催した。しかしこの第6回大会は、日本スペシャルオリンピックス東京地区委員会、社団法人東京都精神薄弱者スポーツ協会及び日本精神薄弱者スポーツ振興協議会が共催という形で、精神薄弱者スポーツ全国大会兼スペシャルオリンピックス全国大会という並列名称で行われた。そして91年に第7回大会を同様の名称で大阪で開催し、この大会を持ってSO大会は幕を閉じた。スペシャルオリンピックスは、東京大阪と交互に開催していたが、毎年定期的に開催されることはなかった。その理由は、この大会が行政主導ではなく、あくまで民間のボランティアの手で支えられていたからである。1980年代は日本において「ボランティア」という言葉がようやく耳にするようになってきた段階であり、まだまだ定着してはいなかった。また大会を開催するための資金難、財政の厳しさ、人材の確保とその継続の困難さ等のため、不定期に開催せざるを得なかった事情がある。そして1992年5月当時の会長参議院議員柳川寛司氏が、今後のSOのために現在の理事会を発展的に解散することを決定した。しかし10年余りの活動の中で、参加した経験がある人々の中である程度スペシャルオリンピックスの名前が浸透し、活動が定着してきたとも言える状況ではあった。さらに(社)東京都精神薄弱スポーツ協会や全日本手をつなぐ育成会の後押しがあり、1992年11月21日、22日の2日間、それまで東京で開催した時と同じ場所の駒沢オリンピック公園陸上競技場を中心会場に第1回全国精神薄弱者スポーツ大会ゆうあいピック東京大会が開催された。開会式では大会史上初めて皇太子殿下が臨席し、全国すべての都道府県・政令指定都市から約3000人の選手が参加して、陸上競技、水泳、フライングディスク、卓球、ボウリング、サッカー、バスケットボール、バレーボール、ソフトボー

ル合わせて9競技に熱戦が繰り広げられた。過去に開催されたスペシャルオリンピック全国大会では、最小で13最多で32の都道府県の参加で会ったことからすると、行政主導で開催すると、良い悪いは別として、如何に盛大に一举に集うかが明白な事実となった。付け加えるに、91年の東京地区大会のパンフレットを見ると第9回スペシャルオリンピック地区大会（第1回東京ゆうあいピック）と大会名が表記されており、当時の複雑な事情が図り知れる。

2-3 新制スペシャルオリンピック日本の誕生と歩み

JSOC日本スペシャルオリンピック委員会が解散したが、その組織が最後に派遣した1991年の夏季世界大会（ミネソタ州ミネアポリス）の日本選手団の中に体操競技のコーチを務めた中村勝子氏がSOの再興を願い、彼女の地元熊本県の当時の知事細川護熙夫人の細川佳代子氏を頼り、93年3月スペシャルオリンピックス熊本が設立された。その後94年11月にスペシャルオリンピックス日本（SON）が誕生し、この時を持って、JSOCの活動はSONに引き継がれることとなった。95年には熊本で全国大会が開催され、以後4年に1回世界大会の前年に、夏季・冬季のナショナルゲーム（全国大会）を2年毎に繰り返し開催している。またもちろん世界大会にも毎回多くの選手団を派遣している。組織的にも01年5月、内閣府より特定非営利活動法人として認証を受け、さらに06年7月認定NPO法人として国税庁より認定を受けた。そうしたなか、民間主導のボランティア主体の草の根運動として、SONは誕生から17年を経過して、設立準備委員会を含めると47都道府県すべてにその組織を設立するまでに成長した。

3. 2009年スペシャルオリンピックス冬季世界大会 概要及び参加状況 ^{(6) (7) (8) (9)}

2009年2月7日（土）～13日（金）世界95の国と地域より約2,000人のアスリートが参加し、ボランティア約5,000人以上の手により、第9回目の冬季世界大会が開催された。もともとアメリカ発祥であり、まず全米に浸透していった経緯があるため、これまでの冬季世界大会も圧倒的にアメリカ合衆国国内での開催が多い。今大会はアメリカ北西部、ロッキー山脈の西側にあるアイダホ州の州都ボイジーで開催された。アイダホ州は、西海岸に面したワシントン州・オレゴン州の東隣にあたり、南はネバダ州・ユタ州、東はモンタナ州・ワイオミング州、そして北はカナダに接している。面積は日本の約2/3、本州よりやや小さいぐらいである。

まず、大会会場や輸送に関して述べる。各会場はどの競技場においても世界大会に相応しく華々しく飾られ、種々



スペシャルオリンピックス冬季世界大会開会式

案内掲示等も非常に分かりやすく、さらにボランティアの配置も十分であり、全く不便を感じなかった。しかし大会本部が置かれているボイジーの中心市街地から北に向かいMcCallの町にあるPonderosa State Parkで開催されたスノーシューイング会場まで片道4時間以上、また東のSun ValleyのDollar Mountainで開催されたスノーボード会場までこれまた4時間以上かかる程、各会場がかなりの広範囲点在していたため、大会全体を眺め全会場を周り観戦したい観客の立場からすると大変不便であったことは否めなかった。

次に大会の内容であるが、開会式のアイダホ州知事の歓迎の言葉にあったがその規模は、アイダホ州有史以来過去類を見ない最大のスポーツイベントである。世界各地から2,000人のアスリートが参加し、アルペンスキー、クロスカントリースキー、スノーボード、スノーシューイング、スピードスケート、フィギュアスケート、フロアーホッケー⁽¹⁰⁾の7競技が開催された。中でも特にフロアーホッケーはスペシャルオリンピックス独自の競技であり、最多の56カ国約1,000人のアスリートが参加した。今大会ではスノーボードが15カ国83人のアスリートの参加であるのに比べると、その参加のしやすさや人気の程がうかがえる。この競



フロアーホッケー試合風景

技は雪や氷のない国のアスリートでも冬季競技に参加できるように考案されたものであり、冬季大会唯一団体競技でもある。体育館で行われ、ルールはアイスホッケーに類似している。防具もそれに近い軽量化した簡易なものを着用する。ステックはゴールキーパー以外は、アイスホッケーと若干異なり棒状で先端が体育館の床を傷つけないように革製の球状になっている。パックはウレタン製のドーナツ状で、非常に軽く、もし早いスピードで身体に当たったとしても怪我をすることはないであろう。もう一つはユニファイドスポーツ®⁽¹¹⁾の浸透である。筆者はフィギュアスケートのペアフリーの予選を見たが、特にロシアチームの技術の高さに驚き、その驚きを上回る演技そのものに魅了された。ユニファイドスポーツ®とは、1991年の夏季世界大会ミネソタ大会から試験的に導入されたが、アスリートの技術や年齢がほぼ同様な健常者とベヤや同じチームを作って競技を行うものである。全競技に採用されており、多くの国がエントリーしているが、残念ながら日本のエントリーはない。

日本選手団はアスリート男子40名女子21名、コーチスタッフ男子15名女子11名、計87名がすべての競技に参加し、熱戦を繰り広げた。ただ冒頭でも述べたように、スペシャルオリンピックスは、通常のオリンピックとは異なり、国別対抗ではないため国旗の掲揚や国会の演奏もなく、世界記録の発表や保管等も一切していない。独自の理念そして競技システムにより、メダル争いといったものは一切ないことを付記しておく。



ユニファイドスポーツ® フィギュアスケートペアフリーの演技

4. スペシャルオリンピックス日本の今後

世界的に見ると、障害者スポーツの祭典と言え、パラリンピックが最高峰であることは言うまでもない。しかしこのパラリンピックは1948年に年ロンドン郊外のストックマンデビル病院脊髄損傷センター所長のルードウイヒ・グ



スペシャルオリンピックス表彰式（全員が表彰される）

ットマン博士が、両下肢麻痺患者のためにリテーションとしてスポーツを推奨し、競技会を開催したことがその起源であり、身体障害者それも後天性の障害者を対象にしてきた経緯がある。知的障害者がパラリンピックに出場できるようになったのは、第1回大会から数えて約50年後の1996年のアトランタ大会からであり、日本選手団の中に知的障害のある選手が加わったのは、2000年のシドニー大会からである。一方、我が国においては、1998年の長野パラリンピックを契機として、障害者スポーツが所謂リハビリテーションの域を超え、一般的な競技スポーツ同様に競技性が強調されるようになってきた。設立して間もなかったスペシャルオリンピックス日本は、その流れとはあえて逆行し、むしろアンチテーゼとしてSOが掲げるすべての者が勝利者という理念の下、独自路線を歩むことになった。さらにJSOCが運営していたスペシャルオリンピックスが、後に行政主導でゆうあいピックとなり全国的な広がりを見せる中で、当時のSON会長の細川佳代子氏が提唱する民間主導の草根運動という形をとってきた。90年代初め我が国においては、民間主導、ボランティアによる手作りの大会は、確かにその価値は認められてはいたが、まだまだ大きな力や多くの人々を巻き込むには至らなかった。さらにSONは設立当初、行政機関とはかなり距離を置く姿勢を如実に表しており、結果当時の障害者スポーツ団体はもとより、行政担当部署、手をつなぐ育成会、精神薄弱者愛護協会、精神薄弱養護学校校長会からほとんど協力を得られないため、SO活動の主役であるアスリートを増やすことができないばかりか、一番の理解者である福祉関係者からの応援を得られないという事態を招いた。また競技会を開催するにあたっては、具体的に言えば、例えば陸上競技のプログラム（練習会）を8回以上行い、最後にその発表の機会として陸上競技大会を開催することになっているが、県や市あるいは教育委員会の後援がないため、陸上競技協会からの協力を得られず、公認審判員を確保できない状況であっ

た。それは、スペシャルオリンピック設立の理念の拠るところの、「社会の隅に追いやられ、本格的なスポーツなどほとんどやる機会が与えられていなかった知的発達障害のある人たちに本物のスポーツを提供することである。」ことに反することであった。それらの状況を踏まえ、軌道修正を大幅に成す最大の契機となったのは、何と言っても06年にスペシャルオリンピック史上初のアジアでの世界大会開催となる2006スペシャルオリンピックス冬季世界大会長野大会であった。この大会を成功に導くことは国内外に向けたSONの究極のアピールになることは言うまでもなく、逆に命運が懸かっていたといえよう。結果としてこの大会を成功裏に終えることができ、障害者スポーツ団体や行政諸関連団体からSO活動の存在価値に一定の評価を得、SON自体の体質が、それらの団体との協調協力路線への転換を遂げることとなった。さらに2年前の08年からスポーツ界に人脈が広く一般的にも著名人である有森裕子氏を理事長に迎えたことは、これまであまり関心を示してこなかった一般スポーツ競技団体からの認知を得ることに少なからず追い風となったことであろう。

欧米では、障害者スポーツはすでに特別なものではなく一般スポーツの一つのカテゴリーとして一般競技団体の一部として連携、強化、振興発展が普通に行われ始めている。我が国においても諸外国のそのような状況に倣うと、まず知的発達障害のある人がスポーツをする場合、その障害を踏まえたコミュニケーションや指導法に配慮を必要とするが、他の障害と比すれば、大部分がもともとの競技ルールをほとんど変更する必要なく参加が可能であり、その意味で一般競技団体の指導者からの直接的な指導を受けやすいとも言えるかもしれない。(財)日本障害者スポーツ協会が(財)日本体育協会の傘下に入ったものの、まだスポーツ現場でそのような恩恵を受けるまでには至っていない。一方、地域のスポーツ現場に近年徐々に浸透しつつある総合型地域スポーツクラブと今後どのように連携していくかも課題となろう。地域に住む障害者を含む幼児から高齢者すべての住民を対象に、他世代・他種目・多様性を柱に、文部科学省と(財)日本体育協会が強力に推進するこのスポーツ施策は、今後の我が国におけるスポーツ環境を大きく再構築することを目指している。この大きなうねりにどう対応していくのか、SO活動の展開にも大きくかわることに違いない。

5. まとめ

2009年第9回スペシャルオリンピックス冬季世界大会が世界95カ国から約2,000人のアスリートが参加し、盛大に開催された。今大会はアイダホ州ボイジーで開催されたが、



日常プログラムの様子 (SON公式ホームページより)

各会場は地理的及び施設の要因から、かなりの広範囲に分散しており観衆側からすれば、不便さを感じざるを得なかった。しかし大会の内容は、世界大会に相応しく華やかで、SO独特の言葉を越えた共感が漂う素晴らしい大会であった。特に目を惹いたのは、7競技中圧倒的に参加者が多いフロアーホッケーである。雪や氷のない国のアスリートでも冬季競技に参加できるように考案されたこの競技は、冬季大会唯一団体競技でもある。体育館で行われ、ルールはアイスホッケーに類似している。もう一つはユニファイドスポーツ®の浸透である。アスリートの技術や年齢がほぼ同様な健常者とペヤや同じチームを作って競技を行うものである。全競技に採用されており、多くの国がエントリーしている。残念ながら日本のエントリーはないが、SO活動にとって、今後このユニファイドスポーツ®をうまく取り入れることが、次代の地域スポーツにおける中心となりうる地域総合型スポーツクラブとの接点であり、まさにそれがユニバーサルスポーツやインクルーシブスポーツとして受け入れられるきっかけとなり、そのことがSO活動の全国的な広がりにつながる大きなカギとなりうると言えるであろう。

注及び参考文献

- (1) 1980年に日本スペシャルオリンピック委員会(JSOC)の組織が日本に創設された。しかしその組織が財政難やその他の事情で解散し、94年に新体制スペシャルオリンピックス日本(SON)として誕生した。
- (2) 鈴木秀雄 「経済系」 関東学院大学経済学会研究論集1985年 第144集 P46-70
- (3) (財)日本障害者スポーツ協会多摩事務所「障害者スポーツの歴史と現状」2002年
- (4) 後藤邦男「スペシャルオリンピックからゆうあいピックへの変遷」2009年
- (5) 「ゆうあいピック東京大会報告書」第1回全国精神薄弱者スポーツ大会東京実行委員会 1993年
- (6) 2009 Special Olympics World Winter Games IDAHO USA Sports Program
- (7) 同上
Transportation Map and Event Schedule

(8) 同上

Commemorative Program

(9) 同上

Family Handbook

(10) 日本においても前々回世界大会の開催地であった長野は特に盛んであり、日本フロアーホッケー連盟が置かれている。スペシャルオリンピックスの活動のみならず小学生の間にも浸透している。また今年度新潟国体の後に開催された全国障

害者スポーツ大会では同競技が公開競技として大会有史以来初めて採用された。

(11) 我が国においてユニファイドスポーツ®の浸透は、障害者と健常者が一緒にスポーツを行うプログラムとして、今後スペシャルオリンピックスの活動が盛んになること、そしてさらに知的障害者のスポーツ全体の発展に関わる大きなカギとなりうると考えられる。